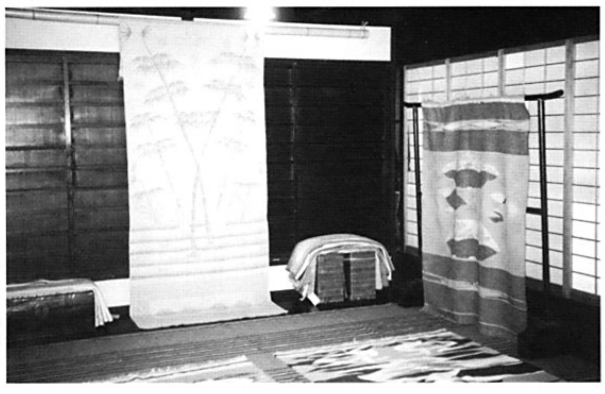
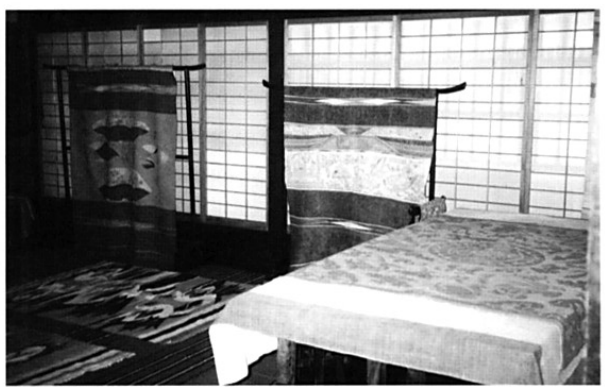


［図様について］
朝鮮毛綴図様は、鳥、動物、花などを中心に図様化したものが多く、古代より聖帝が世に出ずる時、姿を見せる鳳凰、富貴の花としてもてはやされた牡丹などが多く使われている。鳳凰と牡丹花、卍紋と日輪で構成された朝鮮毛綴の裏面に寛永15年寄贈という文字が残っているものが偶然見つかり、素材、技法、図様などから、江戸時代初期に制作された毛綴と予測、確信することができた。又、17世紀初期の洛中洛外図の屏風絵の中に、山鉾巡行の風景が描かれている。山鉾の装飾として、赤地に3羽の鶴が飛んでいる朝鮮毛綴が使われているのを見ることができる。「寛永15年寄贈」のものと、他の図様の「化け物鮮」といわれる不思議な図様、図様が抽象化され正体の知れない、現実には有り得ない図様の朝鮮毛綴の裏面に「拝対島」という文字が残っている、江戸後期の毛綴が発見されている。江戸中期頃には、図様の整理がなされてきたと想像できる。
以上2点については、朝鮮毛綴として確認され調査研究が進んでいる。

［色彩について］
朝鮮毛綴は、色彩的に見て赤が主体である。現存するものは、退色してベージュ系の色になっているが、前述の洛中洛外図の屏風絵やフランク・ディロンが描いた京都の正月風景の中に使用されている毛綴は、鮮明な赤が主体となっている。朝鮮毛綴は、献上品として広く使われたことも大変重要な位置を占める。貢物として朝鮮王朝から中国の各王朝へ献上する品々の中に、黄花席（皇帝献上品）といわれる黄色を主体とした朝鮮毛綴があった。これは一般の花席、彩花席とは違い、黄色、つまり皇帝の色である黄色を中心に各モチーフを構成、一般には出回ることは無であった。前述の寛永15年の朝鮮毛綴は、数少ない藍が使用された毛綴でもある。このことは多くの問題を含み、一つには朝鮮では気候的に藍は育たないのに何故使用されているのかなど、デザイン（図様）プラス色の問題が新たな研究テーマとなってきている。



［使用法について］
朝鮮において、伝統的建物は障子窓が多く寒さを凌ぐために3本のバーで木枠をつくり毛綴をカーテン状態で使用していたのではないかと推測される。現在では、オンドルの普及でこれを見ることはできない。

［産地について］
もう一つの大きな問題は、朝鮮毛綴はどこで生産されたのかということである。この点については、王朝実録の「世相地理誌」から京常北道の6ヶ所程の村々で生産されたと記述があり、産地の特定が確認されている。村々では、産毛動物が飼われ王朝の管理下で生産され、生産された朝鮮毛綴は主に献上品として使われた。
古くから朝鮮毛綴という伝承名の不思議な織物があったが、日本の染色研究書の中には、朝鮮毛綴の研究論文が少なく、その存在を認めながらも調査研究不足で、手探り状態である。その中で吉田氏は、朝鮮大学の民教授との共同研究をはじめ、論文の発表、執筆を行っている。コレクションは多数にわたり、室町時代から現代迄の長い歴史の重みを痛感させられる品々である。時代の流れの中で図様の整理、デザイン化を感じると共に色彩も独特な感性があり興味深いものがあった。京町家のたたずまいの中での終始和やかなセミナーで、吉田氏のこうした毛綴に対する情熱に感動、共感すると共に歴史の重みを痛感したセミナーでもあった。
説明をしていただいた歴史も記録致しましたが、大変専門的な内容でしたので、記録内容に間違いがありましたらお許しください。　リポート［今野文雄］